

超高齢社会に求められる近代的アイデンティティと道徳性 ～日本社会の変容と道徳的葛藤を巡る現代の諸相～

調査研究部 川井 真

1. 社会思想の衰退

日本における後期近代は、物質的な豊かさと個人主義にも後押しされて——政治や社会に無関心であるか、あるいは無関心を装う——サイレントマジョリティ（物言わぬ多数派）が日本全体を席卷する時代が長く続いた。結果、社会あるいは公共という領域から思想や哲学のようなものが消えていったように思える。もちろん、サイレントマジョリティを単に「思考しない人々」として用いたわけではないが、個々の興味が拡散して世間や社会情勢への関心が薄れ、自己の世界に閉じこもる人々が多数派を形成し始めているのではないか、という意味においては同義である。安寧な日々を過ごすことのできる社会環境が用意され、それによって個々の関心事も多様化したことで、他者の暮らし向きや、老いと死にかかわる諸問題、ひいては自由や正義や国家の未来といったような会話が、現実味を失い日常から消え去ってしまったのではないか、という不安な予感である。

そもそも個人主義が常態化して権利が平等に擁護されていれば、社会の意識を集約して世論に転換する必要もなく、さらに経済的に自立した個人であれば、独善主義的な価値観に基づいて“正義”を振りかざし、不快に感じる他者の言動を非難すれば済むことである。社会問題にもなっている“モンスター”と呼ばれる人々の思考のメカニズムも、このような意識において共通しているように思え

る。まさに現代社会は、個人主義的な“ノイジーマジョリティ”（騒々しい多数派）の勢力が支配的になり始めているといっても過言ではないのかもしれない。彼らは社会というものを限局的な個人の領域へと矮小化し、従来社会観を変容させてきた。このような人々はいつ頃から社会に登場してきたのだろうか。

2. 自我の源泉～自由と孤立

振り返れば、社会保障基盤が確立される以前の多産多死社会から、個人所得の向上と生活環境の改善に伴うパラダイムシフトによって、日本社会は少産少死社会へと移行していった。この間、生産年齢人口が総体的に増加し、これらの中間層が社会生活上のすべての価値を支える象徴となったことで、子供や老人あるいは障害者といった、いわゆる社会的弱者の存在価値——皮肉にも福祉制度の充実によって見過ごされるようになった存在の意味——が相対的に低下していった時代とも言える。まさに「老いたら負け」、「死は敗北」という価値観に縛り付けられていたのは、医学や医療の世界に限ったことではない。

たしかに、戦後日本の産業経済は低賃金の人口パワーによって支えられてきた。そこで完成されたサラリーマン社会は国民総中流社会とも呼ばれ、皆が平等に——とりわけ物質的価値観に基づく——豊かさを享受できる社会になったのである。エリート意識に煽られた企業戦士たちによる、仮想のブルジョア社

会も登場した。しかしながら、人間は平等が自覚されるようになると、平等であることへの不満が生じ始める。その不満は野心を増殖させ、平等であることへの不安を高めていくことになる。ただ多くの場合、このような野心が——本質的な意味において——満たされることはない。現代人の多くは、豊かな社会の中で、満たされざる野心と払拭することのできない不安を抱えながら、日々の暮らしを送っているのかもしれない。

さらに、都市という空間が登場したことにより、そこに新しい生活スタイルが生まれ、人間関係の捉え方にも変化が求められるようになっていった。都市では従来型のコミュニティは解体され、主に“核家族化された家庭”と“就労場所となる組織”が、都市生活者における新たなコミュニティとして誕生するが、このような生活空間を取り巻く意識の変化が、個人主義や利己主義を加速させ、社会的孤立を生み出す原因にもなったと理解することができる。拍車をかけたのは自己責任原則の徹底であろう。高度に専門化し多様化する社会において、すべてを理解したうえで自己防衛を貫徹するのは容易なことではない。現代社会において、信頼は主として契約によって担保され、法律によって守られる以外に逃げ道はなくなってしまった。

3. 求められるパラダイムの大転換

さて、現代日本人の人生観や社会観の形成が、資本主義経済の進展と産業構造の転換、それに伴う職業価値観の変化と密接に関係していると考えすることは、たぶん誤りではない

だろう。わたしたちは、高度経済成長の恩恵を受けながら、豊かで利便性の高い生活に慣れきっている。しかし、日本はすでに人口オーナス期を迎えている。それは人口構造が経済発展の足枷となる状態に入ったことを意味している。生産年齢人口は団塊の世代のリタイアに伴って今後急速に減少していく。未来を支える年少人口は——現時点における将来推計値をみる限りにおいて——減少傾向を示し、それに対して65歳以上の高齢者人口が2040年前後まで増加していく見込みである¹。長寿社会を背景とする高齢者人口の増加は医療および介護ニーズを高め、社会的コストを増大させる最大の要因と考えられている。しかしながら、このような人口構造の変化は単に産業経済の衰退と社会的コストの増大のみを意味しない。時の流れは、今日の人生観と社会観を作り上げてきた中間層を高齢化させ、さらには、その人々が——既存の価値観に照らせばコストファクターというレッテルを付けて——この国のマジョリティになるということでもある。

まさに時代はパラダイムの大転換期を迎えようとしている。現在、その大転換に向けて最も意識変革を求められている世代は、現代社会のフレームワークを創り上げてきた40代から60代の人々であろう。いま、わたしたちを取り巻く社会では、「人間としての本性」、「高度に発展を遂げた文明」、そして「一人で生ることを強いる環境」の狭間で緊張と葛藤が生じ始めている。それは社会への期待と満たされざる欲求を巡るトリレンマである。わたしたちの生存欲求は集団に依存しなくとも

1 国立社会保障・人口問題研究所：日本の将来推計人口（年齢3区分別人口規模および構成の推移）

満たされるし、高度な情報テクノロジーを活用することで自己実現も可能である。しかしながら、人間という生物が——生涯を通して——社会に依存することなく生きていけると考えるのは妄想でしかない。生老病死にリアリティを再現し、加速する個人主義あるいは利己主義に警鐘を鳴らすためにも、“いのち”と“くらし”にフォーカスした公共性の構造転換が必要な時代が到来している。

4. 市民社会の本質～公共とは何か

著名なヘーゲル研究者でありコミュニタリアニズム（共同体主義）の提唱者としても知られるチャールズ・テイラー（Charles Taylor）は、著書『近代～想像された社会の系譜²』において市民社会を構成する重要なファクターでもある公共圏の役割を、以下のような分析を行うことで明らかにしている。

公共圏とは、「社会の成員が意見を交換しあい共通の見解に達することができる、新しい超場所的な空間のことだった。だからこそ公共圏は超場所的な行為主体を創出したわけだが、しかしそれは社会の政治体制にはいっさい依存しない、しかも完全に俗世の時間の中だけで存在する、そういう行為主体だった」、続けて「政治の外部に存在し、世俗的であり、超場所的であるような空間——公共圏とはそういうものであったし、現在でもなおそうである」（Taylor）として、公共圏は時空を超えた意識空間であって、それは時間の経過とともに姿を変えても、現代社会においてなお、その役割と機能が市民社会にとって不可欠の意味を持っていると主張する。

ここで言われる“超場所的な空間”とは——テイラーに少なからぬ影響を与え続けている——ドイツの社会学者ユルゲン・ハーバーマス（Jürgen Habermas）が『公共性の構造転換』で論じた「世論という新しい概念」を生み出す空間のことである。それはミュージカルやパブリックビューイングに群がる集団によって作り出されるような限局的な共同空間ではなく、様々なメディアが介在することで——時空を超えた広がりを持って——社会的想像を生み出す共同空間を意味している。

また“超場所的な行為主体”とは、時間と場所を異にする人々が共通の事柄について関心を示しているとき、彼らの意識は非集会的な空間において共有されたものと見做すことができ、それが上述した世論となるわけだが、このような世論を作り出す行為者としての一般市民を指している。

そしてテイラーが使用する“世俗的”という表現が含意するものとは、形而上学的な慣習や狭義の教会法などによる支配からの脱却である。これは主にテイラーの考察対象となった社会が、一神教的な宗教倫理が支配的であった西洋近代の社会であったことと俄かに関係している。またそれは宗教的な時間概念にも関係がある。テイラーによると、近代に至り、前近代社会に存在した多次元的な高次の時間は拒絶され、すべての出来事は同時性の概念のもとに集約されるようになったとしており、そのような考え方は「関係の有無に関わりなく無数の出来事が一つにまとめられ、ばらばらな時間の断片が重層的に集積し

2 チャールズ・テイラー、上野成利訳『近代——想像された社会の系譜』2011

たもの、こういうものが社会だと考えられるようになっていったのである」(Taylor) という文脈からも感じ取ることができる。

このような公共概念はテイラーの思想へと反映されていくわけだが、彼のコミュニタリアニズムが、リベラリズムを批判しながらも一方では近代的市民社会を受け入れ、そこに共和主義的な古来の道德秩序を織り込むかたちで、社会的多元性を包摂した民主主義を再構成しようとする企てへと展開されていった経緯が、ここからも推察できる。テイラーの有する道德秩序観念は、彼が挙げる以下の四つの論点から窺い知ることができる。

- (1) 相互利益の秩序は個人（あるいは少なくともより大きな階層的な秩序からは独立した道德的な行為者）のあいだで保たれる。
- (2) 利益のなかに含まれる決定的に重要な要素は生命および生命維持の手段であるが、ただしこれを保証することは徳の実践と関わっている。
- (3) 秩序とは自由を保証することを意味し、その表現はさまざまな権利の条件のうち容易に見出せる。
- (4) これらの権利、こうした自由、このような相互利益は、すべての参加者にたいして平等に保証されねばならない。

これらによって構成される道德秩序観念は、テイラーが用いる社会的想像という言葉に内包される意味領域の中核をなしている。テイラーの考える社会的想像とは「人が自分の社会的な実存について想像するしかた」のことであり、それは「われわれがごく当たり前の事柄として互いに求める期待、われわれ

が集合して社会生活を営むのを可能にするような共通理解、こういったものが社会的想像には組み込まれている。共同の慣行を遂行しながら全員で協調する方法について、何らかの感覚が社会的想像には含まれているわけである」という彼の言葉に鮮明に表れている。背景にあるのは道德的な秩序への共通認識、ひいては形而上学的な秩序への共通理解も含めた観念であり、それは時間とともに新たな創出と修正を繰り返しながら形成され、緩やかに変容を遂げながら維持されていくものであるとされる。

5. 日本社会の公共圏と日本人のアイデンティティ

テイラーが考察するのは西洋近代における公共圏であったが、では、わが国の市民社会に内包される公共的意識を支えてきたのはどのような原理であったのだろうか。とりわけ近代における——主に産業構造の転換による——ゲマインシャフト（地縁社会）からゲゼルシャフト（利益社会）への急速な変化を経験した日本社会は、そこで生成されるラディカルなパラダイム・シフトに呼応して、いかなる公共を新たに創出してきたのだろうか。上述したとおり、どうやら健全で持続可能な市民社会を形成するためには、良質なコミュニケーションを可能にするような——あるいは自発的な結社が自由に活動するための——公共圏の存在が不可欠であると考えられる。そして公共圏では道德的な秩序への共通認識が求められ、その深層には死生観や宗教観が少なからず関与しているものと思われる。そこで念のため、日本における従来型のコミュニティが形成・維持されてきた諸要因を概観

し、それがどのような経過を辿って現代の社会様式へと変容してきたのかを、主に“道徳秩序”の意識を共有する観念論的背景や“アイデンティティ”形成の過程にフォーカスして探っていきたい。

古来、日本人の道徳的秩序観念の形成において支配的なのは、その独特な宗教観にあると言ってもいいだろう。小規模な村社会の集合体として形作られてきた日本社会では、地域共同体の絆を保つための神話ともいえる民俗信仰が各地に多数存在している。それは神事でもある祭りや盆踊りも同様であって、住民同士の精神的な結束を維持する触媒としての機能を果たしてきた。

とりわけユニークなのは、日本人という民族が、神と仏が共存する世界に生きてきた歴史を持っているということである。これは世界的にみても興味深い文化であると言っている。神仏習合の思想は日本古来の神々の世界に——外来宗教の象徴でもある——仏や菩薩を自然に受け入れ、神仏同体説や本地垂迹説などの思想を生み出していった。日本人にとって宗教行事は暮らしと密接に関係しているが、その多くは特定の教義や儀礼に拘束されるものではなかった。

日本人の宗教観は地域共同体の絆に依拠しており、成員同士の社会的アイデンティティを繋ぎ合う民俗信仰であり、それはスピノザ汎神論とも共鳴するような自然崇拜であった。アニミズムを起源として、いのちを育む山川草木と共にあり、それは神話や伝説となって語り継がれていた。土地を守護する鎮守神を祀り、ご先祖様を大切に敬う。先祖は身近な自然の中において草葉の陰から子孫を見守

り、ときには輪廻転生をして子となり孫となる。また、浄土思想に由来するとされる彼岸会法要では、春秋の季節に彼岸と此岸を魂が行き交い、死者と生者が交流する。故人の魂は——季節の到来を告げるかのように——生まれ育った土地へ帰ると信じられていたからである。

現代でも、とりわけ農村地域に散見される小規模コミュニティでは、祖先の魂は家族や親族のみならず、コミュニティの成員が総出で迎える。まさに日本人の宗教観はコミュニティを基盤に生まれ、住民同士の信頼と秩序、地域社会への帰属意識を維持していた。このような魂の円環をソーシャル・キャピタルと捉えてもいいのかもしれない。

6. 失われたアイデンティティ～再興への道筋

では、このような文化と世界観を育んできた日本人は、走馬灯のように変化するめまぐるしい時代の変遷のなかで、日々の暮らしに何を求め、何を獲得し、そして何を失ってしまったのだろうか。

気がつけば日本人は——社会保障の充実と経済的自立を背景に——ある意味で能動的ニヒリズムへの道を突き進んでいったのではないだろうか。ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche) をして「神は死んだ」と言わしめた真意は、アリストテレス (Aristotelês) から受け継がれる形而上学への挑戦であって、それが絶対的自由の追求であったとしても、意図したのは神への隷属から人民を解放することであった。しかし一方で、多くの日本人は欧州諸国の人々とは異なり、上述したとおり、支配的な宗教思想を共有しているわ

けではなかった。日本人にとってのニヒリズムは、道徳哲学を支えてきた宗教観を否定し、倫理や秩序の支えとなっていた神を否定することだったのかもしれない。結果、コミュニティは形骸化し、信頼関係は薄れ、自発的協力によって支えられてきた社会機能もまた、急速に衰退していったとみることできる。

この背景には“アイデンティティの喪失”という問題が横たわっているように思える。古代キリスト教神学者であるアウレリウス・アウグスティヌス (Aurelius Augustinus) は、自我の源泉を神ではなく“自己の内面性”に求め、それはデカルト (René Descartes) 以降の啓蒙思想に受け継がれていくが、ポスト・モダン思想に至っては自己の日常的欲求を重視する自然主義的な観点から、自由へと過度に傾斜した個人主義への潮流を加速させている。古来、共同体によって育まれてきた社会的なアイデンティティは、個人主義への移行によって、自由と権利を最優先する自己アイデンティティへと緩やかに変化していった。とりわけ日本は、上述したとおり、産業構造の転換と都市への人口流動により、多くの地域共同体も解体されてしまった。日本人は、満たされざる野心と払拭することのできない不安を抱え、このストレス社会の中で、生の源泉であり、精神の拠りどころとなるアイデンティティを、喪失してしまったのかもしれない。

たとえばテイラーは、わたしたちは今日までアイデンティティの形成における“善”の役割をなおざりにしてきたとして、アイデンティティにとって“善”への認識は必要不可欠の要素であると主張している。そして“善”を以下の三つの次元に分類する。まず

「個人がより善く生きるための“善”」があり、次に「正義や慈愛といった普遍的な“善”」があり、そして最後に、「それに対する愛がわたしたちを善き行動や善き存在へと導く“善”」があるとして、アイデンティティにはこれら三つの“善”の感覚が内包されているとしている。テイラーはこのような手法を用いて、現代の道徳的空間に存在する緊張と葛藤を調停しようとしたのである。テイラーは、アイデンティティと“善”を融合させることにより——正しい行為を規定して義務の履行を強制するような——堅苦しい道徳を解体し、個人の尊厳と自由を保ち、それぞれが生きいきと己の意思の下で、人生の意味を見出すことのできる地平を切り拓こうとしたのである。

7. 公共と経済～相互利益を生み出す秩序

このようなアイデンティティは産業経済の発展とも強く結び付いている。経済は社会と結びつき、公共圏において展開されるようになったからである。18世紀以降、神が創造する精緻な設計図に基づいて人間を含むあらゆる被造物が機能しているといった社会概念は後退し、人間の営みのなかに“見えざる手”が組み込まれ、わたしたちの行為や行動が、わたしたちの思惑を超えたところで社会全体の幸福に結びついているという認識が入り込んでくる。これに関して最も著名な考察を行ったのがアダム・スミス (Adam Smith) の『国富論』である。

このような経済もまた、政治の外部に存在し、世俗的であり、良質なコミュニケーションと自発的な活動によって支えられる仕組み

であるが、ただ、上述した公共圏とは大きく異なる点がある。ここに存在する行為者は、あくまでも自己のために行動する個人であり、それが結果として社会全体の幸福や福祉を向上させるものだとしても、それぞれの行為者を突き動かしている動機は自己利益の追求である。この局面で求められるのは、やはり社会的に自己を理解するということであり、スミスが示した新しい概念ともいえる“相互利益を生み出す秩序”なのかもしれない。後期近代の過ちは、この道德秩序観念を維持することに失敗したことにある。

たとえば、日本の資本主義の父と呼ばれ、社会事業家でもあった渋沢栄一の講話集『論語と算盤』（守屋淳訳）のなかに次のような一説がある。「人情の弱点として、利益が欲しいという思いがまさって、下手をすると富を先にして道義を後にするような弊害が生まれてしまう。それが行きすぎると、金銭を万能なものとして考えてしまい、大切な精神の問題を忘れ、モノの奴隷になってしまいやすいのだ」とし、また実業家としてのアイデンティティを感じさせる言葉として「わたしは常に、精神の向上を、富の増大とともに進めることが必要であると信じている。人はこの点から考えて、強い信仰を持たなければならない。わたしは農家に生まれたから教育も低かった。しかし幸いにも中国古典の学問を修めることができたので、ここから一種の信仰を持つことができたのである」という発言がある。そして、社会的に自己を理解するという観点からは「…その富が自分一人のものだと思うのは、大きな間違いなのだ。…国家社会の助けがあって、初めて自分でも利益が上げられ、安全に生きていくことができる。…富を手

すればするほど、社会から助けってもらっていることになる」という言葉に着目すべきであろう。当時、渋沢は利己主義へと暴走する人々に警鐘を鳴らしている。資本主義経済を健全に維持するための道德秩序の重要性、また資本主義の脆弱性について、このときすでに渋沢は気付いていたのだろう。

わたしたちの“いのち”と“くらし”は行政のみならず、様々な産業と、それを具現化している企業活動によって支えられている。高度経済成長を下支えした人口ボーナスの時代は、社会的要請と需要の拡大に後押しされて建設業や製造業、電気・ガス・水道や金融・保険業などが隆盛をきわめ、まさに社会の持つ経済機能が中心となって“くらし”の豊かさを演出してきた。そして行政機能もこれに随伴するかのようサービス拡大を目指した。しかし一方では、都市化という社会現象と産業構造のドラスティックな変化に伴い、地域共同体の形骸化が自助や互助といった社会機能を急速に萎ませていったのである。すでに到来している人口オーナスの時代においては、この社会機能の回復が求められている。

経済機能を支える産業も、農林漁業や教育・学習支援業、そして医療・福祉を取り巻くサービス業へと変化していくことが予想される。これによってサービスの概念も変わり始めることだろう。とりわけ医療・介護サービスに求められるサービスの質とは、もっと根源的な、人間と人間、人間と組織、そして人間と社会の関係性を調和させる潤滑油としての機能である。現代マーケティングの大家であるフィリップ・コトラー (Philip Kotler) は、「サービスとは、一方が他方に対して与える、本質的に無形の活動またはベネフィット

であり、結果として何の所有権ももたらされないものである³⁾という表現を用いているが、新しい社会が求めるサービスとしては、この解説は必ずしも適切ではない。

近年、多くの国民は人生を豊かに生きるための社会サービスに関心を持ち始めており、賢い消費者もしくは自覚する消費者たちは、必ずしも所有にこだわることなく、社会的価値を高めるサービスや商品に富を分配し始めている。ここに存在するサービスは一方通行のパフォーマンスなどではなく、地域社会という領域において、産官民が共鳴し合う新たな価値創造への協同作業である。

8. アイデンティティの再構成～日本的コミュニティの再生へ

過去、人間と自然が織り成す物質代謝によって緩やかな発展を続けてきた経済活動は、いつの頃からか空を飛び交うマネーによって支配され、それは“くらし”の空間から引き離され、特定の間人たちによって繰り広げられるバーチャルな活動——あるいは一種のゲーム——へと転換され始めていた。さらに、産業革命によって幕を開けた重化学工業社会では、大量生産大量消費のエネルギー需要に応えるために、きわめてリスクの伴うエネルギー革命を推進した。結果、エネルギー消費量と経済成長はリンクし、自然を破壊しながら——ときとして“いのち”を蝕みながら——膨大なエネルギーを浪費する社会を作り上げてきたと言ってもいい。

そろそろ、資本主義経済は終焉を迎えようとしているのかもしれない。資本主義の根幹

を支えたのは、プロテスタンティズムの倫理に代表されるような、欧米を中心とする一神教的な宗教倫理であった。そのことからすれば、アニミズムをルーツとする日本人のやわらかな宗教観、すなわち海や山や大地に神々の姿を映し出し、物語の継承によって道徳観念や死生観を育んできた日本人は、ともすると資本主義に隠された危険な魔力に翻弄されやすい内面性を持っている。その意味では、健全な資本主義社会を形成するための日本人の足腰は弱い。かくして暴走する自由によって歯止めを失った社会は、人間という生物が宿命的に背負っている生老病死という現実を視界の外へと追いやり、過度の市場経済至上主義の世界へと国民の意識を牽引したという見方もできるのではないだろうか。

現代日本人が歩んだ経済成長への道程は、それがあたかも自己実現の手段であるかのようにも映り、満たされざる野心の増幅を助長したのである。たしかに、貧困からの脱却を願うエネルギーが労働への活力となり、国民総中流社会という象徴的な社会モデルを作り上げた。さらには新興ブルジョアジーの登場によって需要と供給の好循環が作り出され、経済は拡大再生産を繰り返しながら発展を続けてきた。しかしながら、すでに社会は物的欠乏の状態からは脱却し、いつしか“モノ”や“サービス”の意味や価値が問われる時代へと変容している。今日に至っては、政府が連呼する環境・医療分野等における“技術革新による需要の拡大”（民主党Manifesto2010）も、何やら妄想になりつつあることを誰もが予感しているのではないだ

3 フィリップ・コトラー／ゲイリー・アームストロング『コトラーのマーケティング入門（第4版）』1999

ろうか。膨張は極限に達すると、後は萎むしかない。

テイラーや渋沢の言うように、利他的行為（社会）と利己的行為（経済）を調停するのは道徳秩序の概念である。それは“善”と向き合う積極的な姿勢を持つことでもあり、わたしたちは“善”を取り巻く恒常的な緊張と葛藤の中に身を置いている。自由という広大な地平を彷徨いながら、ときおり自我という迷宮に迷い込んで苦悩する、このような行為の繰り返しが社会経済を安定させることになるのだろう。わたしたちは、そろそろ健全な公共圏を再興しなければならない。そのためには、テイラーが示すような三つの“善”を内包するアイデンティティを確認しあい、自己の内部から自浄作用が働くような環境を創り出すことが重要であろう。日本人はそもそも礼節を重んじる民族であったはずだ。またソーシャルキャピタルもすでに存在していた。ゆえに日本人が今日まで大切に守ってきた感性や、大らかな宗教観に包まれた農山村のコミュニティは、近代的アイデンティティを形成するうえでも適しているように思える。もちろん、単に地縁社会を復活させようというのではなく、身の丈にあった社会経済を、世代を超えて交響する社会的想像によって再構成するのである。これから日本中の至るところで、日本型コミュニティを再生するための社会的想像が、すべての住民の思考を通して展開されることを期待したい。

【参考文献】

- ・テイラー (Charles Taylor)、上野成利訳『近代——想像された社会の系譜』岩波書店、2011
- ・テイラー (Charles Taylor)、田中智彦訳『〈ほんもの〉という倫理——近代とその不安』産業図書、2004
- ・テイラー (Charles Taylor)、下川潔訳『自我の源泉——近代的アイデンティティの形成』名古屋大学出版会、2010
- ・テイラー (Charles Taylor)、伊藤邦武訳『今日の宗教の諸相』岩波書店、2009
- ・コトラー (Philip Kotler) / アームストロング (Gary Armstrong)、恩蔵直人監修、月谷真紀訳『コトラーのマーケティング入門 (第4版)』ピアソンエデュケーション、2000
- ・渋沢栄一著、守屋淳現代語訳『現代語訳 論語と算盤』筑摩書房、2010
- ・ハーバーマス (Jürgen Habermas)、細谷貞夫・山田正行訳『第2版 公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求』未来社、1994
- ・テンニエス (Ferdinand Tönnies)、杉之原寿一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト——純粋社会学の基本概念—— (上)』岩波書店、1984
- ・テンニエス (Ferdinand Tönnies)、杉之原寿一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト——純粋社会学の基本概念—— (下)』岩波書店、1985

【参考資料】

- ・川井真『日在医会誌』第10巻・第2号、日本在宅医学会、2009年2月、pp. 11-16 (pp. 126-131)